

わが国の世相が混迷する中、経済活動や物質文化重視の陰でこころのあり方が問われ、精神の荒廃を嘆く声も久しい昨今である。しかしその一方で、東日本大震災の当初、被災地の人々が示した忍耐強さ、規律の正しさが世界の各地から称賛され、永年培われてきた日本人の精神文化の奥深さをそこに見る思いがした。

今日、大学では専門の学問領域の学修を深め、研究を進めることは言うまでもないが、同時に時代のニーズに応じた人材を育て、社会に送り出すことも求められている。中でも教育・研究とともに、社会貢献という大学の役割を担ううえでは、地域社会に貢献する

仏教思想と 人材育成

古河良皓

●立正大学学園理事長

人材や、グローバル人材の育成をいかに進めるかが問われている。

私は、立正中学から高校、立正大学、大学院と立正一筋に過ごしてきた者の一人であり、現在は学校法人立正大学の学園の理事長職を務めている。寺院に生まれ育ち、寺の住職となつてから長らく宗門の立法府や行政にも関わつてきたので、仏教界から高等教育機関へと活動の場が移り、しばし戸惑いを感じたものである。

しかし、つねに大学の名称でもある「立正」の二文字が念頭にあって、離れることはなかった。なぜなら、「立

正」とは、鎌倉時代に活躍された日蓮聖人の著述『立正安国論』によるところであり、それは仏陀釈尊の真実、正当なる教えを弘め実践することによつて、個人の幸福と、社会や国土の安穩の実現を説示している。私は、この立正安国の思想と精神を人生の大切な信条としていくからである。

そもそも立正大学の淵源は、四三四年前の天正八（一五八〇）年に現在の千葉県匝瑳市に設けられた日蓮宗僧侶の教育機関にさかのぼる。時代は下り、明治五（一八七二）年の開校以来、一四二年の歳月を経て、現在は八学部一

五学科、七研究科の総合大学へと発展してきた。

この間を貫く本学の教育理念は仏教精神による人間形成であり、それは本学の建学の精神である「真実を求め至誠を捧げよう、正義を尊び邪悪を除こう、和平を願ひ人類に尽そう」に反映されている。

その根底には、仏典である『法華経』の思想がある。初期大乘仏教経典の一つである『法華経』は、古来「諸経の王」と呼ばれ、インドからシルクロードを通り、中国、日本にもたらされた。そして聖徳太子や伝教大師を中心として、日本人のこころと文化に大きな影響を与えたことは周知のとおりである。そこには仏陀釈尊の叡智が説かれ、慈悲心や菩薩の思想、平等や忍耐、寛容や相互尊重など、多くの思想をくみとることができると。

言うまでもなくこうした仏教思想は、大学における人材の育成という観点から見てても実に有益である。例えば、慈

悲心は人々を哀れみ、慈しむことであり、その実践を勧めるものが菩薩の思想や利他行である。また、先に触れた立正安国の思想は、正しきを立てて世のため、人類社会のために貢献すべきことを説くものであり、これらは国内外の社会への貢献を促す思想と言うことができよう。

さらに『法華経』に示される寛容の思想は、たとえ自分を攻撃するような者に対しても、それを忍んで相手を受け入れるべきことを、相互尊重（人間礼拝）の思想は、相手の尊厳に対してつねに敬いのこころをもって接すべきことを説いている。これらは、グローバル化の今日、留学生の送り出しや受け入れを進める中で、異なる言語や文化、習慣に接する内外の学生たちが、スムーズな交流をもつために必要な精神である。グローバル人材の育成とは、言語能力やコミュニケーション能力を磨くばかりでなく、こうした精神面を充実させることも大切だと思う。

本来、人間の根源的な苦悩を解決し、救済の道を示す仏教の教説と思想は、同時に人としての生き方とところのものち方を明示しており、人材を育てる指針として教育の中でさらに一層生かしていくべきものと言えよう。まさにそれが、仏教精神による人間形成そのものに違いない。

日々の教育の現場を通して、学生諸君に専門分野の学修とともに、精神面での成長を大いに願うところである。

